

さて、その翌日、いよいよ最後の目的地である紀伊宮原へ向った。生憎、この日は天候が悪く、車窓観察の条件はあまり良くなかったが、それでも和深、江佳のあたりで、海岸段丘、富田で bay head delta それに段々畑にびっしりと植わっているミカン等を、ながめながら、紀伊宮原に到着。

この農協で、この宮原地区におけるミカン栽培の実態について、話を聞く。

それによると、現在、ミカン栽培のうち、約30%ほどが、水田転換したものであるが、日本においては、かつて水田を他の商品作物の畑に変える事は、ほとんどなかったそうである。これは、米作に対する愛情というか、執着というものから来るのであろう。しかし経済がそうした emotion に勝った訳である。ここは、土地の傾斜が急で、見ただけでも、あのような急傾斜地での栽培の苦勞が思われた。収穫されたミカンは、ケーブルで下ろされるそうである。現在の一番の問題は、土壌が古く、水の便が悪いため、かん水が必要な事である。かん水をする時、ミカンの甘味が、ずっと増すのだそうで、スプリンクラーなどが工夫されている。

さて、有田川沿いのミカン栽培については、卒論などで詳しく考察されているので、ここでは、ごく簡単にした。

これで、巡検が終了した訳だが、この度の巡検は3泊4日で、紀伊半島の海岸線をぐるっとまわるという強行軍だったため、どうしても観察が散漫になってしまった。

しかし、ある地域を総合的にながめるといふ目的は、この巡検の後に行った徽音祭の発表のための総括の結果、少しは、達せられたのではないかと思う。 (3学年 森山・鳥居)

鳥取から高松へ (正井教官)

昭和42年3月13日~15日

13日の午前10時、鳥取駅に集合。鳥取大学の豊島先生の御案内で、鳥取砂丘(浜坂砂丘)へ向った。戦前は鳥取連隊の演習地であったこと、戦後は市と鳥取大とで折半し自然状態での保存に努めていることが原因で、よく保存されている鳥取砂丘は、面積的には必ずしも大きくないが、起伏が大で複雑な形態をしている。砂は予想に反して黄色(長石による)だったが、手にとってみると、白色(石英)、黒色(角閃石)の粒も混じっている。この砂の平均粒径は0.3~0.4mmで、風速毎秒5m以上になると、その3乗の量の砂が運搬される。ここには風下斜面の傾斜30~35°、風上斜面の傾斜15°内外をもつ砂丘が2列並んでいる。第1列は、新たに海岸前面に堆積し成長した新鮮な白灰色の砂から、第2列は、第1列よりも黄色く古砂丘を風触し再堆積した砂から成り、

古墳時代の末期に生まれ現在に至っていると考えられている。これらの他に、花崗岩や安山岩の露出もみられ、大山火山の爆発による火山灰層や、縄文式土器の出土によりかつては人類が住んでいたことが明らかになった古砂丘（化石砂丘）も存在している。また、蟻地獄を思い出させる“スリバチ”と呼ばれる漏斗状の凹地も多い。砂丘の緑地化は、まづにせあかしやを植え、それを保護材として松を植え、松の卓越によって完成するという方法に従って、おこなわれているが、砂丘保存のため全面的緑地化はしない方針だそうである。ビニールハウスによるキュウリ、チューリップ等の花、らっきょう、長いもの栽培も行なわれており、第三紀丘陵の後背地ではナンが作られている。かつて“嫁殺し”といわれた浜井戸による灌漑も、スプリンクラーの利用により機械化、大規模化されてこの地域の農業に希望を与えているそうである。

車中から観察をしながらも、因美線で津山市に向った。

津山市は、市を東西に流れる吉井川の左岸に発達した城下町であるが、国鉄が川の右岸にあるため駅から川まで小規模の市街地が形成されている。入母屋造りの家並の間に、津山市文化センターに代表されるようなコンクリートのビルも、ぼつぼつ建っているが、自転車の目立つ市街地にまだしっくりなじめないように思われた。

14日、鶴山公園から市を眺めた後、姫新線で新見市に向った。車中で真庭郡の某地に住んでいらっしゃるという方から親切な説明を伺いながら観察をする。新見で伯備線に乗り換え、吉備高原と高梁川の美しい景色にみとれているうちに、倉敷に到着した。

倉敷市の一面、倉敷川のほとり、白壁、黒い本瓦、土蔵造りの家々は、徳川時代天領地として栄えた面影を今も残している。民芸館の館長さんが、手と足を使って織物をしながら文化論を語られた。大原美術館も見学した。水島工業地帯に象徴される新しいものと、土蔵造りの家並に象徴される古いものとの相克は、館長の文化論にも、市の政策と対立しているというこの静かな一面にも、市庁舎にも、見いだすことができた。

15日、児島湾の干拓地である都六区を見学した。干拓地に入ってまづ気がつくことは、道と水路が整然と通っていることだ。道に沿って入母屋造りの農家が、ぼつんぼつんと建ち路村と散村の中間をなしていた。経営規模は1ha程度で、水田の他藷草栽培にも土地を利用していた。また島畑には、そら豆、ネギなどの野菜を、ビニールトンネルでは、白菜を作っていた。養鶏をしている農家も目立った。見学の途中、雨が降り出し予定を繰り上げて宇野から宇高連絡線で高松へ渡った。瀬戸内海でも降り続けた雨は、3時すぎにようやくやみ、香川大学で正井先生の“アメリカの都市と農村”についての講演を伺った後、同大学の先生の御案内で、16階建ての銀行の屋上から高松市を見学した。

初めての巡検で痛切に感じたのは、観察力のなさであった。自然地理の勉強の必要、特に感じた。ゲーテは、“知らないことこそ重要で、知っていることは役に立たない。”と述べているが、あまりにも知らないことが多い私は、この言葉に勇気づけられる一方、それを実感として理解することのむずかしさにぼう然となってしまふ。

(2学年 長谷川記)

那 須 (松井 教官)

1966年10月10日~13日

松井先生的那須巡検は試験休みを利用して、10月10日~13日の4日間にわたって行われた。上野から東北本線に乗るとすぐ、プリントを片手に、車窓からの勉強が始まった。

武蔵野末端ローム層、荒川後背湿地、大宮洪積台地とその土地利用景観等を見ながら。その後、利根川沖積低地から宇都宮台地に移行し、宇都宮から東方に向い種々の段丘を横切って箒木川を渡った後大田原浮石流の露頭を見、ここから那須盆地に入った。

10日午後は日光街道を中心とした市街地を通り抜け、小泉・新屋敷付近の鹿島川の河岸段丘に至る。ここで那須野面と親園面の比高と揚水ポンプの分布を見た。さらに小泉南部の小丘陵の如き金丸高原の露頭で、ローム層、鳥の目礫層、大田原浮石流を観察した。

11日はバスで箕輪まで行き、那須疏水や蛇尾川、熊川の扇状地特有の枯川をみた後、比高測定によって、高林面と折戸面の崖を追跡した。

12日は大田原市より南にのびる街道沿いに約4Km程バスに乗り、水田の広がる地帯に出た。このあたりは水利に恵まれた地域なので、江戸時代から水田がよく発達している。それ故、処々に大きな構えの屋敷が見えた。

その後、青木の集落に入ったが、ここは明治9年3月に完成した水門によって、34町歩が開田され、一面が水田となっている。

同日午後は那須野面と親園面の境界をはっきりさせるつもりで歩いたが、境界が明瞭な部分は、ごくわずかであった。

13日は、旅館から南に下って中央道路の比高を測定した。この道路が傾斜しているのは、その基盤が傾斜しているためであるということが、側方からの測定によって判った。

又、那須野は緩傾斜地が畑に利用されていたが、かなり多くの礫を含んでいるのが見られた。又ここは、ほとんどが自給用作物であるが、とうがらしだけが商品作物として一面に栽培されているのが印象であった。

今回の巡検は主に比高測定によって段丘面の境界を明らかにすることに重点がおかれた。これは卒論で地形分類をするために非常に良い勉強になったと思う。

(4学年 王城・西山)